

歸命の命

越部良一

KOSHIBE Ryoichi

伝 法然「本願歸命之十ヶ條」(『昭和新修法然上人全集』) 最初の二条、「一、南無歸命といふは、いまのわれらが命体なり。すなはち智慧なり。智慧すなはち一心なり。一心すなはち無量寿如来なり。[中略] 二、南無歸命といふは、南無も寿、歸命も命とさとりて候。[中略] これ御回向の命とするべし。これを天親菩薩は真實無碍光如来といふ。善導和尚は歸命寿覚とはんべり」。

「彼の安樂世界を觀じて、阿弥陀如来を見たてまつり、彼の国に生まれんと願ずることを示現するが故なり。いかに觀じ、いかに信心を生ずる」(天親『浄土論』)。これで願生の心が信心であると分かる。「我一心といふは」「無碍光如来を念じたてまつりて安樂に生ぜん」と願ずること、心心相續して他の想ひ間雜することなしとなり」(曇鸞『論註』)。願生心は一心である。「願生安樂国といふは、この一句はこれ作願門なり。天親菩薩の歸命の意なり」(同上)。願生の心は歸命(南無)である。阿弥陀仏(無量寿如来)の第十八願、「至

心・信樂・欲生我國」。よって、願生心(欲生心)たる歸命は弥陀の本願、願心である。本願力回向の歸命である。「向に觀察莊嚴仏土功德成就と莊嚴仏功德成就と莊嚴菩薩功德成就を説きつ。この三種の成就是、願心をして莊嚴せりと、知るべし。略説して一法句に入るが故に。一法句とは、いはく清浄句なり。清浄句とは、いはく真實の智慧無為法身なるが故に」(『浄土論』)。これで願心が仏土(浄土)、仏(阿弥陀仏)であること、真實、智慧、無為、法身と「一」であることがわかる。以上、故に、歸命(信心、真實)は阿弥陀仏である。「南無歸命」は南無阿弥陀仏である。「仏願に乗ずるを我が命とす」(『論註』)。

「本願歸命之十ヶ條」最終條、「しづかにおもひはんべるに、妄想顛倒のそこには有為の相續のねふりいまださめず。悪性邪見のくるしみさかなれば、法性の月いまだあらはれず。さればにや、四大離散の門にはただちに広開浄土の門をひらく」。寂靜のこのおもひは、『無量寿經』で「独仏知耳」と言われる仏知。「さればにや」の前までは、善導の第一深信、歸命の「さとり」(覚)の核心である。「四大離散」とは肉体の死、自身の流轉の事。「広開浄土門」(善導『觀經疏』)とは弥陀・釈迦の所為、それを「ひらく」のは我、これを「南無・歸命」(「本願・歸命」と二者の相応(「心心相續」、一心)で表し、「歸命寿覚」と顯す。かくして「即ち延年転寿を得」(法然『選択集』。善導『觀念法門』からの引文)。即得往生の有り姿、生死即涅槃の悟りである。